

## 巻頭言

〈小特集〉「暴力からの人間存在の回復」  
研究会ワークショップジェンダーと身体Special issue:  
Workshop of Research Group for Recovery of Human  
Being from Violence: Gender and Body

本特集は2019年1月12日に立命館大学衣笠キャンパスで行われた、立命館大学人文科学研究所重点研究プロジェクト「間文化現象学と人間性の回復」の「暴力からの人間存在の回復」研究会主催ワークショップ「ジェンダーと身体」で発表された論考を集めたものである。

本ワークショップでは、現象学、分析哲学、クィア理論など哲学的背景の異なる哲学研究者、小手川正二郎氏（國學院大学）、西條玲奈氏（京都大学）、藤高和輝氏（大阪大学）の三名を招き、ジェンダーというテーマを、身体という切り口からそれぞれ論じていただいた。

はじめに、哲学においてジェンダーを取り上げる必然性について述べておきたい。近年、男性の割合が比較的高い哲学の分野でも、全国規模の学会で男女共同参画を目的としたシンポジウムが開催されるなど、徐々にジェンダー研究に触れる機会は増えつつある。とはいえ、取り立ててジェンダー研究を専門にしていない限り、哲学研究者がジェンダー研究に触れる機会は未だわずかである。また、哲学研究者の中には、ジェンダーというテーマを応用的な研究とみなして、哲学のハードコアではないと考える者が少なくないように見受けられる。しかし、メルロ＝ポンティ風には「現実の世界から離れ真理の世界に遊ぶ」ように見える哲学者も「この身体であり、このジェンダーである」ことから出発してのみ自らの思索を行いうるのである。

それゆえ、実は、ジェンダーこそあらゆる哲学者ないし研究者が不可避免的に考えなくてはならないテーマなのではないだろうか。

以上の事情から、今回のワークショップの第一の目的は、哲学研究者がジェンダー研究と接触する機会を創ることであった。だが、それに加えて哲学の中の異なるディシプリン間の対話を促すこと、そして、哲学以外の専門の方に、〈具体から遊離した抽象〉としての哲学ではなく、現実の諸事象を考察の対象とする哲学的なジェンダー研究に触れてもらうこと、といったことも目的とした。実際、ここに収められた三つの論文は、各々の経験に根ざした哲学的思索に他ならない。以下で、各論文の簡単な解説をしておこう。

小手川氏は、フェミニスト現象学の立場から、男性が自らの「男らしさ」への希求を周囲に投影し、周囲から「男らしさ」を期待されていると感じることを「男性的」自己欺瞞と名付け、この自己欺瞞にはある種の心地よさが伴うこと、そして男性はこの自己欺瞞に注意深くあるべきであることを主張している。その上で、フェミニズムの成果と対立するのではなく、それに学んだ「フェミニズム的男らしさ」というあり方を提案している。

西條氏は、AIを活用した音声アシスタントや人型ロボットといった人工物がしばしば性差別的表現になりうるという問題意識に基づいて、分析フェミニスト哲学の立場から、生殖を行わず意識も持たないがゆえに、生物学的性もジェンダー・アイデンティティも持ち得ない人工物がジェンダーを持つとはどういうことかを考察し、ジェンダーに関する差別やステレオタイプに加担しないデザインを提案している。

藤高氏は、「心の性」のような心身二元論的な用語によって、「体の性」との不一致として病理化されてきたトランスジェンダーの身体経験を、メルロ＝ポンティの身体イメージという概念を手がかりに、よりの確に捉える枠組みを提案している。性別違和とは客観的物質的な身体という「現実」に対する精神的混乱、「治療の対象」ではなく、身体イメージを介して生きられる身体という紛れもない「現実」に他ならないことを主張している。

なお、本ワークショップの会場には多くの学内外の研究者、院生・学生などの姿も見られ、ディスカッションでも積極的な参加を得られた。本ワークショップはその目的を果たし、参加者にとって哲学的なジェンダー研究に接触する機会となるとともに、研究機関や分野を横断した交流の場となることができたと思われる。これもひとえに提題者の方々と、参加者とりわけ活発な議論に加わった質問者の方々のおかげである。また研究会代表の加國尚志教授、人文科学研究所の方々にも開催にあたってご協力いただいた。この場を借りて感謝申し上げる。

文学部初任研究員

酒井麻依子

